私の時代の卓球部

――中共未だ弱き頃――

十一期生　大塚　二郎

西卓会の一員であること自体、私は非常な名誉と思っています。もう35才かと思う一方、オレはまだ若いのだと思いながら、勤務先の東京工業大学サッカー部監督兼コーチとして、講義の合間を見ては週に三日は百mのダッシュ十本以上をかかしておりません。

一九五六年の七月頃でしたか、私は自分の体のないのを理由に水泳部をやめ、卓球部に入りました。まず、二年生の城川キャプテンのもとにショートハンドの素振りから教えられ、私生活においても勉強と運動を両立させる方法を教えられました。

その頃の日本は、大先輩であり、インドのボンベイでの世界選手権で活躍された荻村氏の時代で、私のラケットにはったラバーも、荻村先輩よりは薄い厚さ一センチ位あるスポンジでした。ですから、ショートハンドで球を返すと、野球でいうフォークボールのような落ち方をするのです。

ところが、その後複雑な事情でスポンジを禁止され、私は大学に入る頃には卓球のプレーをする意欲をすっかりなくし、サッカーに転じてしまいました。もちろん、私に卓球の才能がなかったことも、卓球から離れてしまう一因であっことは確かです。

当時の十一期の部員は、私のほかに、二年時キャプテンの高村、黒田、菊地etc・十人弱というところで、なかなかくせ者ぞろいでしたが、コーチもなく、自分で研究しながらプレーするといった有様で、都大会では二、三回戦どまり、個人戦では四～五回戦というのが普通でした。

卓球部の部長はドブチューこと藤崎先生、オキャンこと古川先生、と記憶しています。第一次世界大戦時生まれのオキャンは、しきりに年のことを気にしながら三鷹の荻村道場その他へ通っていたようで、私がちょっと手を抜くと負ける程の腕前でした（私が弱かった?）。

たしかな年号は覚えていませんが、たしか一九五六年か五七年の世界選手権が東京都体育館で行なわれ、私が見に行った時の日本のメンバーは、荻村先輩、一枚ラバーの富田、女子は渡辺、江口等しか記憶にありませんが、打っても打ってもシェークハンドで返ってくるヴェトナムのマイ・バン・ホアが、十分も二十分もラリーを続けていたのをよく覚えています。

当時、スウェーデン等は非常に弱く、一枚ラバーで守備一辺倒でした。イングランドの女子が結構強く、ローンテニス

でも強いという「ヘイドン」に日本の渡辺が大苦戦したのも覚えています。

もう一つ覚えていることは中華人民共和国が参加していたことで、深紅のユニフォームで、台から少し離れたシェークハンドで、手首を強く使ってプッシュする打ち方ですが、あまり強くはない……しかし、この戦法をマスターすれば、大中国ゆえそのうち世界にのしてくるに違いない、と感じられました。

今考えてみると、日本選手は打つのにあまりに無駄な力を使い過ぎており、サッカーのごときフットワークが乱れがちだったようです。勿論、日本は男女共一位と記憶しているのですが……。

そして、強打の田中選手が荻村先輩と共に一九五七年か五八年に西高に来て下さり、アクロバチックなゲームを見せて下さったことが、私の脳裏に残っています。

最後に、日本の卓球界も、高校生あたりに良き才能を持った者が多く、将来の強い日本卓球を願うと共に、西高卓球部の繁栄を祈りつつ筆を置かせていただきます。

楽しかった西高時代

十二期生　隅田　献

西高生の時代は私の青春時代でした。卓球部の仲間と、又他の運動部の仲間と、そしてクラスの仲間と、いろいろなことを話し、遊び、悩み、苦しみ、そして笑いました。今にして思えば私の一生の中で、一番楽しかった懐しい時代だったように思います。

私達の頃は、荻村先輩の全盛期で、何につけても荻村先輩と卓球日本が影響していました。私自身卓球を始めたのもそうでした。又、当時卓球部の入部者が非常に多く、台も少ないこともあって、一年生の頃は台につける時間は非常に少ない状態でした。その為、練習に3回連続して休んだ人からどんどん首にして数減らしをする始末でした。

又、荻村先輩も世界選手権の後でエキジビジョンに来校され、私自身も一期上の高村先輩と組んで、ダブルスの手合せをさせて戴き、卓球生活のすばらしい想い出となりました。

私達の時は、内田先輩、加賀見先輩、浜田先輩、村田先輩等々の西高の黄金時代の方々がしばしば指導に来て下さいました。諸先輩の熱心な指導で、西高の選手のフォームはすば